

デートバイオレンス・ハラスメント被害者の 対処行動とその効果：改訂版デートバイオ レンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (5)

OCHI, Keita / 越智, 啓太

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

99

(終了ページ / End Page)

109

(発行年 / Year)

2019-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022418>

デートバイオレンス・ハラスメント被害者の 対処行動とその効果

—改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (5)—

越 智 啓 太

要 旨

本研究では、デートバイオレンス・ハラスメントに対して、被害者はどのような対処方略をとるか、また、それはどの程度効果があるのかについて検討を行った。その結果、言語による抗議がもっとも効果が大きく、反抗や静観は効果が少ないということがわかった。また、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が大きくなると、より積極的な方略がとられるようになるようになること、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が重いほど、対処方略の効果が少なくなることなどが示された。

キーワード：デートバイオレンス，ドメスティックバイオレンス，恋愛，対処行動，ストーキング

1. 問 題

交際中のカップル間における暴力行為、ハラスメント行為は、デートバイオレンス (dating violence)、あるいはデートハラスメント (dating harassment) と呼ばれる。未婚のカップル間のこのような行為は、「いやならば、別れてしまえばいいだけではないか」と思われることが多く、別れることが困難な配偶者間のドメスティックバイオレンス (domestic violence) に比べて、それほど深刻な問題ではないと考えられることも多い。しかし、実際にはさまざまなメカニズムによって、「別れられない」、「別れることができない」ような状況になり、人権侵害的な状況が継続されることになることが少なくなく、見過ごすことのできない問題である。また、そもそも、恋愛という人生における幸福なイベントを苦悩に満ちた不幸なものにしてしまったり、デートバイオレ

ンスやハラスメントを受けたことから、恋愛自体を拒否したり、臆病になったり、十分に楽しめない (最悪の場合には PTSD などのトラウマティックな状況) を引き起こしてしまうものでもある。そのため、これらの行為の現状を把握し、その発生を予測したり、対処したり、予防したりすることが必要である。しかしながら、デートバイオレンスの実態についてはいまだ十分な実証研究が不足しており、わかっていないことも多い。

そこで、我々は、デートバイオレンス、ハラスメントの程度を測定する尺度を作成し (越智・長沼・甲斐, 2014; 越智・喜入・甲斐・佐山・長沼, 2015a, 2016)、被害者や加害者の属性との関連やカップル間の恋愛進展状況との関連などについて分析を加えてきた (越智・喜入・甲斐・長沼, 2014; 越智・喜入・甲斐・佐山・長沼, 2015b)。

本研究はこの調査の一環として、デートバイオレンス・ハラスメント行為への対処行動とその効果について重点的に検討してみようと思う。対象

は交際中の相手がいる男女であり、彼らを対象にして、さまざまなタイプのデートバイオレンス・ハラスメントが行われた場合、被害者として、どのような対処方略をとるのか、また、そのような対処方略はどの程度有効なのか、あるいは逆効果なのかということを明らかにしていきたい。

2. 方法

調査参加者：あらかじめ調査会社のデータベースに登録されている調査協力候補者の中から、現在異性と交際している全国の18歳～39歳までの未婚の男女1,600名（男性800名、女性800名）を調査対象としてウェブ調査を行った。交際の定義としては、「つきあっている（交際している）」とは、一回以上ふたりきりでデートをしたことがあるということで、告白や正式な交際宣言などをしたりしている必要はない。他の人と平行して交際しているか否かは問わない」とした。調査対象者の平均年齢は、28.24歳（s.d.6.38）、男性29.42歳（s.d.6.23）、女性27.05歳（s.d.6.30）である。なお、調査は株式会社クロス・マーケティングに委託して行った。回答はおおむね5～15分程度で行われた。この調査に回答することで参加者にはのちに商品などと交換することができる一定のポイントが与えられた。なお、この調査はわれわれの研究プロジェクトにおける第3回目、第4回目のウェブ調査であった。

実施した質問紙の内容：調査対象者には、まず改訂版デートバイオレンス・ハラスメント被害尺度（越智・喜入・甲斐・佐山・長沼, 2015）を実施した。これは、デートバイオレンス・ハラスメントを、身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、つきまといの7つの領域について「机や壁を殴る、蹴るなどして相手から脅かされたことがある（間接的暴力）」、「相手へのLINEの返事が遅かったり、既読なのに返事を送らなかったとして腹を立てられたことがある（支配監視）」、「いやがっているのに性的な接触をしていくことがある（性的暴力）」

などの質問に「まったくない」「ほとんどない」「たまにある」「ときどきある」「よくある」の5段階で評定させるものである。各領域5問ずつの質問から構成されている。

次に各バイオレンス・ハラスメントのそれぞれの領域において、すべての項目に「まったくない」と回答した調査参加者を除く参加者に、そのようなバイオレンス・ハラスメント行為に遭遇した場合に、最もよくとる反応について、「そのようなことをしないでくれという・注意する・説得する（抗議）」、「逃げる（逃走）」、「無視する・距離を置く（無視）」、「反撃する・いやがらせをする（反抗）」、「特に何もしない（静観）」の5つの選択肢からひとつを選択させ、さらにその効果（帰結）について、「事態は非常に改善する」、「事態は改善する」、「事態はやや改善する」、「事態は変わらない」、「事態はどちらかといえば悪化する」、「事態は悪化する」、「事態はひどく悪化する」の7段階から選択させた。

3. 結果

3-1. デートバイオレンス・ハラスメントの被害率

デートバイオレンス・ハラスメント尺度の1項目以上に「まったくない」以外の回答を行った参加者数とその割合についてTable 1に示した。言語的なバイオレンス・ハラスメントを受けている者が最も多く、身体的なバイオレンス・ハラスメ

Table 1 デートバイオレンス・ハラスメントごとの被害率

	被害実数	被害率
身体的	419	26.2%
間接的	565	35.3%
支配監視	718	44.9%
言語的	742	46.4%
性的	567	35.4%
経済的	577	36.1%
つきまとい	448	28.0%

（調査人員の合計は1,600名）

ントを受けている者が最も少なかった。しかし、身体的なバイオレンスに関しても、少なくとも4人にひとり程度の割合で被害を報告しており、このようなバイオレンス・ハラスメントが比較的ポピュラーに存在していることが示された。また、これを男女別に集計したものをTable 2にあげる。男女の差について正確二項検定を行った結果、身体的、間接的、支配監視、つきまといで1%水準で、経済的で5%水準で有意な差が認められた。言語的、性的なものについては男女差は認められなかった。興味深いのは、男女差が認められたものに関してはいずれも男性のほうが女性よりも被害率が高かったという点である。一般のデートバイオレンスに関する統計では多くの場合、男性よりも女性の被害率が高くなるが、今回はこれと逆の傾向になった。じつはこのような傾向は質問方法に依存しているということがわかっている。つまり、たんに「身体的虐待によるDVを受けたことがあるか」などの質問をすると女性のほうが被害率が高くなるのだが、より具体的な行為ベースで質問すると男性の被害率のほうが高

くなるのである。これは同じ行為が行われても、それが「デートバイオレンス・ハラスメント」だと認知するかどうかの部分に男女差があり、男性のほうがそのように認知しにくいということを反映しているのだと思われる。

3-2. デートバイオレンス・ハラスメント行為と対処行動, その効果

身体的暴力に対する対処方略とその効果

身体的暴力に対してどのような対処方略がとられるのかについての度数をTable 3にあげた。抗議が最も多く、無視、静観がそれに続き、反抗、逃走はそれほど多くなかった。対処方略についての男女差について集計したものをTable 4にあげた。 χ^2 検定の結果5%水準で有意になった。残差分析の結果、これは、女性は反抗が多いことから生じていた。次に直接的暴力に対する対処方略とその効果の関連について集計したものをTable 5にあげた。ここにあげられている数値は、それぞれの対処方略をとった場合の帰結についての評定値の平均である。評定は、「事態は非常に改善

Table 2 デートバイオレンス・ハラスメントごとの男女別被害率

	男 性		女 性		正確二項検定
	実 数	被害率	実 数	被害率	
身体的	269	33.6%	150	18.8%	$p < .01$
間接的	329	41.1%	236	29.5%	$p < .01$
支配監視	415	51.8%	303	37.9%	$p < .01$
言語的	376	47.0%	366	45.8%	<i>n.s.</i>
性 的	266	33.2%	301	37.6%	<i>n.s.</i>
経済的	313	39.1%	264	33.0%	$p < .05$
つきまとい	286	35.8%	162	20.3%	$p < .01$

(調査人員の合計は男女800名ずつ)

Table 3 デートバイオレンス・ハラスメントの種別ごとに見た対処方略 (%)

	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
抗 議	30.8	34.2	35.9	34.0	38.1	26.5	28.1
逃 走	7.6	7.4	5.4	4.2	7.9	5.2	6.9
無 視	22.7	24.8	22.6	22.6	20.5	20.1	25.7
反 抗	14.1	12.4	6.4	8.8	10.2	8.1	8.3
静 観	24.8	21.2	29.7	30.5	23.3	40.0	31.0

Table 4 デートバイオレンス・ハラスメントに対する男女別の対処方略の違い (%)

		抗議	逃走	無視	反抗	静観	χ^2	p
身体的暴力	男性	31.6	7.1	23.4	10.4	27.5	10.1	$p < .05$
	女性	29.3	8.7	21.3	20.7	20.0		
間接的暴力	男性	32.8	7.3	25.8	8.8	25.2	14.8	$p < .01$
	女性	36.0	7.6	23.3	17.4	15.7		
支配監視	男性	33.5	7.0	24.6	5.8	29.2	8.4	$n.s.$
	女性	39.3	3.3	19.8	7.3	30.4		
言語的暴力	男性	30.1	5.6	23.4	7.7	33.2	10.1	$n.s.$
	女性	38.0	2.7	21.9	9.8	27.6		
性的暴力	男性	27.1	7.5	25.9	12.0	27.4	28.8	$p < .01$
	女性	47.8	8.3	15.6	8.6	19.6		
経済的暴力	男性	23.6	5.4	22.4	10.2	38.3	8.1	$n.s.$
	女性	29.9	4.9	17.4	5.7	42.0		
つきまとい	男性	27.3	7.3	29.0	7.3	29.0	5.7	$n.s.$
	女性	29.6	6.2	19.8	9.9	34.6		

(太字は残差分析で有意に大きいことが示された部分)

Table 5 デートバイオレンス・ハラスメントの種別ごとに見た対処方略の効果

	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
抗議	2.72	2.77	2.73	2.77	2.80	2.67	2.67
逃走	3.25	3.17	3.21	3.29	3.16	3.43	2.87
無視	3.39	3.28	3.46	3.39	3.46	3.41	3.42
反抗	3.81	4.00	3.93	3.68	3.53	3.60	4.14
静観	4.13	4.03	3.94	3.94	4.08	4.13	4.11

(数字は1~7で数値が小さいほど効果が大きいことを示す)
(太字は状況が悪化することを示す)

する (1)~「事態は変わらない (4)~「事態はひどく悪化する (7)」の7段階評定になっており、4以下が何らかの改善が見られたことを、4以上は状況が悪化していることをさし、数値が小さくなるほど効果が大きいことを意味する。この数値について、対処方略×性別の二元配置の分散分析を行ったところ、対処方略の主効果は1%水準で有意となった ($F(4,409)=13.99, p < .01$) が、性別の主効果 ($F(1,409)=1.26$) と対処方略×性別の交互作用 ($F(4,409)=0.613$) には有意な差が見られなかった。Tukey法による多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観がそれぞれ5%水準で有意となった。

間接的暴力に対する対処方略とその効果

間接的暴力に対してどのような対処方略がとられるのかについての度数を Table 3 にあげた。抗議が最も多く、無視、静観がそれに続き、反抗、逃走はそれほど多くなかった。この傾向は、ほかのバイオレンス・ハラスメントと同様であった。対処方略についての男女差について集計したものを Table 4 にあげた。 χ^2 検定の結果1%水準で有意になった。残差分析の結果、これは女性は反抗、男性は静観が多いことから生じていた。次に間接的暴力に対する対処方略とその効果の関連について集計したものを Table 5 にあげた。この数値について、対処方略×性別の二元配置の分散分析を行ったところ、対処方略の主効果は1%水準

で有意となった ($F(4,555)=17.44, p < .01$) が、性別の主効果 ($F(1,555)=2.83$) と対処方略×性別の交互作用 ($F(4,555)=1.265$) には有意な差が見られなかった。Tukey法による多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—反抗、逃走—静観、無視—反抗、無視—静観がそれぞれ5%水準で有意となった。

支配・監視に対する対処方略とその効果

支配監視に対してどのような対処方略がとられるのかについての度数を Table 3 にあげた。抗議が最も多く、無視、静観がそれに続き、反抗、逃走はそれほど多くなかった。この傾向は、ほかのバイオレンス・ハラスメントと同様であった。対処方略についての男女差について集計したものを Table 4 にあげた。 χ^2 検定の結果有意な差は検出されなかった。次に支配監視に対する対処方略とその効果の関連について集計したものを Table 5 にあげた。この数値について、対処方略×性別の二元配置の分散分析を行ったところ、対処方略の主効果は1%水準で有意となった ($F(4,708)=35.90, p < .01$) が、性別の主効果 ($F(1,708)=.585$) と対処方略×性別の交互作用 ($F(4,708)=1.225$) には有意な差が見られなかった。Tukey法による多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—反抗、逃走—静観、無視—静観がそれぞれ5%水準で有意となった。

言語的暴力に対する対処方略とその効果

言語的暴力に対してどのような対処方略がとられるのかについての度数を Table 3 にあげた。抗議が最も多く、無視、静観がそれに続き、反抗、逃走はそれほど多くなかった。この傾向は、ほかのバイオレンス・ハラスメントと同様であった。対処方略についての男女差について集計したものを Table 4 にあげた。 χ^2 検定の結果有意な差は検出されなかった。次に言語的暴力に対する対処方略とその効果の関連について集計したものを Table 5 にあげた。この数値について、対処方略×性別の二元配置の分散分析を行ったところ、

対処方略の主効果は1%水準で有意となった ($F(4,732)=33.43, p < .01$) が、性別の主効果 ($F(1,732)=.070$) と対処方略×性別の交互作用 ($F(4,732)=1.318$) には有意な差が見られなかった。Tukey法による多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観がそれぞれ5%水準で有意となった。

性的暴力に対する対処方略とその効果

性的暴力に対してどのような対処方略がとられるのかについての度数を Table 3 にあげた。抗議が最も多く、無視、静観がそれに続き、反抗、逃走はそれほど多くなかった。この傾向は、ほかのバイオレンス・ハラスメントと同様であった。対処方略についての男女差について集計したものを Table 4 にあげた。 χ^2 検定の結果1%水準で有意となった。残差分析の結果、これは、女性は抗議、男性は無視、静観が多いことから生じていた。次に性的暴力に対する対処方略とその効果の関連について集計したものを Table 5 にあげた。この数値について、対処方略×性別の二元配置の分散分析を行ったところ、対処方略の主効果 ($F(4,557)=25.73, p < .01$) と対処方略と性別の交互作用 ($F(4,557)=3.61, p < .01$) が1%水準で有意となった。性別の主効果 ($F(1,557)=3.61$) には有意な差が見られなかった。Tukey法による多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観、反抗—静観がそれぞれ5%水準で有意となった。対処方略と性別の交互作用は、抗議 ($t(214)=2.797, p < .01$)、逃走 ($t(43)=2.26, p < .05$) のふたつの対処方略について、男女で差が認められ、女性よりも男性で効果があることによって生じていた。

経済的暴力に対する対処方略とその効果

経済的暴力に対してどのような対処方略がとられるのかについての度数を Table 3 にあげた。静観が最も多く、抗議、無視がそれに続き、反抗、逃走はそれほど多くなかった。この種の行為については、被害者は何もしない場合が多いことがわ

かった。対処方略についての男女差について集計したものを Table 4 にあげた。 χ^2 検定の結果有意な差は検出されなかった。次に経済的暴力に対する対処方略とその効果の関連について集計したものを Table 5 にあげた。この数値について、対処方略×性別の二元配置の分散分析を行ったところ、対処方略の主効果 ($F(4,568)=34.24, p < .01$) と対処方略×性別の交互作用 ($F(4,568)=3.159, p < .05$) が有意になったが、性別の主効果 ($F(1,567)=1.775$) には有意な差が見られなかった。Tukey 法による多重比較の結果、抗議—逃走、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観、反抗—静観がそれぞれ5%水準で有意となった。対処方略と性別の交互作用は、抗議 ($t(151)=2.496, p < .05$) の対処方略について、男女で差が認められ、女性よりも男性で効果があることによって生じていた。

つきまといに対する対処方略とその効果

つきまといに対してどのような対処方略がとられるのかについての度数を Table 3 にあげた。静観が最も多く、抗議、無視がそれに続き、反抗、逃走はそれほど多くなかった。この種の行為については、被害者は何もしないことが多いことがわかった。対処方略についての男女差について集計したものを Table 4 にあげた。 χ^2 検定の結果有意な差は検出されなかった。次につきまといに対する対処方略とその効果の関連について集計したものを Table 5 にあげた。この数値について、対処方略×性別の二元配置の分散分析を行ったところ、対処方略の主効果は1%水準で有意となった ($F(4,438)=26.62, p < .01$) が、性別の主効果 ($F(1,438)=0.515$) と対処方略×性別の交互作用 ($F(4,438)=0.578$) には有意な差が見られなかった。Tukey 法による多重比較の結果、抗議—無

視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—反抗、逃走—静観、無視—反抗、無視—静観がそれぞれ5%水準で有意となった。

3-3. デートバイオレンス・ハラスメントの程度と対処行動の選択

前節の分析は、若干でもデートバイオレンス・ハラスメントがあった場合のデータを全て込みにして分析していた。しかし、もちろん、デートバイオレンス・ハラスメントにも程度があり、対処方略もその程度によって異なっていることが考えられる。そこで、デートバイオレンス・ハラスメントを受けている人の中で、それぞれの尺度の得点が平均以下のものと平均以上のもの（平均値を Table 6 に示す）に参加者を分割し、それぞれのデートバイオレンス・ハラスメントごとにとられる方略について集計してみた。その結果を Table 7 にあげた。

それぞれのデートバイオレンス・ハラスメント項目ごとにその程度によってとられる方略が異なるかどうかを χ^2 検定した結果、全ての項目で1%水準以下の有意な結果が示された。つまり、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が軽い場合と重い場合では対処方略が異なっているということになる。残差分析を行った結果、身体的暴力では、バイオレンス・ハラスメントの程度が重くなると抗議が減り、無視が増えること、間接的暴力では、抗議、静観が減り、無視が増えること、支配監視、言語的暴力では、抗議、静観が減り、逃走、無視、反抗が増えること、性的暴力では、抗議、静観が減り、無視、反抗が増えること、経済的暴力では、静観が減り、逃走、無視、反抗が増えること、つきまといでは、抗議、静観が減り、無視、反抗が増えることが示された。

一般にデートバイオレンス・ハラスメントの程

Table 6 デートバイオレンス・ハラスメントを受けたことがあるものの各尺度の平均値

	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
平均値	11.7	10.4	10.9	10.4	10.7	10.8	10.8

Table 7 デートバイオレンス・ハラスメントの程度と対処方略の違い (%)

		抗議	逃走	無視	反抗	静観	χ^2	p
身体的暴力	平均以下	37.5	5.6	14.4	16.2	26.4	24.5	$p < .01$
	平均以上	23.6	9.9	31.5	11.8	23.2		
間接的暴力	平均以下	38.1	6.8	20.5	10.4	24.1	16.0	$p < .01$
	平均以上	28.4	8.3	31.0	15.3	17.0		
支配監視	平均以下	40.0	3.8	17.0	4.0	34.5	38.2	$p < .01$
	平均以上	29.9	7.5	29.6	9.4	23.6		
言語的暴力	平均以下	37.5	1.8	19.1	5.8	35.9	49.6	$p < .01$
	平均以上	28.5	7.9	28.2	13.4	22.0		
性的暴力	平均以下	45.9	7.6	13.1	6.4	26.9	47.8	$p < .01$
	平均以上	27.5	8.3	30.4	15.4	18.3		
経済的暴力	平均以下	27.7	3.0	17.3	3.3	48.8	50.2	$p < .01$
	平均以上	24.9	8.3	24.1	14.9	27.8		
つきまとい	平均以下	34.7	5.6	15.5	3.6	40.6	65.7	$p < .01$
	平均以上	19.8	8.6	38.6	14.2	18.8		

(太字は残差分析で有意に大きいことが示された部分)

度が軽い場合には、抗議、静観が用いられ、その程度が重くなるとより積極的な方略である逃走、無視、反抗が生じることがわかった。

3-4. デートバイオレンス・ハラスメントの程度と対処行動の効果

身体的暴力に対する対処方略とその効果

身体的暴力について、その程度が平均以下か以上かということと、とられた方略について2×5の二元配置分散分析を行った。その結果、バイオレンス・ハラスメントの程度について ($F(1,409)=8.941$)、対処方略 ($F(4,409)=18.731$) がそれぞれ1%水準で有意となったが、程度×対処方略の交互作用 ($F(4,409)=1.718$) については、有意差はなかった。デートバイオレンス・ハラスメント程度については、程度が重いほど効果が少ないという傾向があった。対処方略については、数値としては、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順で効果があり、多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観の間がそれぞれ5%水準で有意となった。各条件ごとの平均値を Table 8 に示した。

間接的暴力に対する対処方略とその効果

間接的暴力について、その程度が平均以下か以上かということと、とられた方略について2×5の二元配置分散分析を行った。その結果、対処方略 ($F(4,555)=20.523$) が1%水準で有意となったが、バイオレンス・ハラスメントの程度 ($F(1,555)=3.73$) と程度×対処方略の交互作用 ($F(4,732)=1.765$) については、有意差はなかった。対処方略については、数値としては、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順で効果があり、多重比較の結果、抗議—逃走、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—無視、逃走—反抗、逃走—静観、無視—反抗、無視—静観の間がそれぞれ5%水準で有意となった。各条件ごとの平均値を Table 8 に示した。

支配・監視に対する対処方略とその効果

支配監視について、その程度が平均以下か以上かということと、とられた方略について2×5の二元配置分散分析を行った。その結果、バイオレンス・ハラスメントの程度 ($F(1,708)=21.204$) と対処方略 ($F(4,708)=32.997$) がそれぞれ1%水準で有意となったが、程度×対処方略の交互作

Table 8 デートバイオレンス・ハラスメントの対処方略とその効果

		抗議	逃走	無視	反抗	静観
身体的暴力	平均以下	2.80	3.08	3.13	3.51	3.89
	平均以上	2.58	3.35	3.52	4.25	4.43
間接的暴力	平均以下	2.64	3.17	3.23	4.03	3.74
	平均以上	3.01	3.16	3.32	3.97	4.64
支配監視	平均以下	2.54	2.80	3.35	3.56	3.78
	平均以上	3.05	3.46	3.53	4.13	4.24
言語的暴力	平均以下	2.65	3.13	3.28	3.04	3.80
	平均以上	3.00	3.35	3.51	4.10	4.30
性的暴力	平均以下	2.65	2.96	3.44	3.24	3.93
	平均以上	3.17	3.40	3.47	3.70	4.36
経済的暴力	平均以下	2.30	3.10	3.29	4.64	3.98
	平均以上	3.23	3.60	3.53	3.28	4.51
つきまとい	平均以下	2.75	2.86	3.36	3.78	4.09
	平均以上	2.51	2.88	3.44	4.25	4.16

(数字は1~7で数値が小さいほど効果大きいことを示す)
(太字は状況が悪化することを示す)

用 ($F(4,708)=0.698$) については、有意差はなかった。程度については、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が重いほど効果が少ないという傾向があった。対処方略については、数値としては、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順で効果があり、多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—反抗、逃走—静観、無視—静観の間がそれぞれ5%水準で有意となった。各条件ごとの平均値を Table 8 に示した。

言語的暴力に対する対処方略とその効果

言語的暴力について、その程度が平均以下か以上かということと、とられた方略について2×5の二元配置分散分析を行った。その結果、バイオレンス・ハラスメントの程度 ($F(1,732)=15.310$) と対処方略 ($F(4,732)=31.125$) がそれぞれ1%水準で有意となったが、程度×対処方略の交互作用 ($F(4,732)=1.765$) については、有意差はなかった。程度については、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が重いほど効果が少ないという傾向があった。対処方略については、数値としては、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順で効果

があり、多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観の間がそれぞれ5%水準で有意となった。各条件ごとの平均値を Table 8 に示した。

性的暴力に対する対処方略とその効果

性的暴力について、その程度が平均以下か以上かということと、とられた方略について2×5の二元配置分散分析を行った。その結果、バイオレンス・ハラスメントの程度 ($F(1,557)=9.520$) と対処方略 ($F(4,557)=19.577$) がそれぞれ1%水準で有意となったが、程度×対処方略の交互作用 ($F(4,577)=0.788$) については、有意差はなかった。程度については、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が重いほど効果が少ないという傾向があった。対処方略については、数値としては、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順で効果があり、多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観、反抗—静観の間がそれぞれ5%水準で有意となった。各条件ごとの平均値を Table 8 に示した。

経済的暴力に対する対処方略とその効果

経済的暴力について、その程度が平均以下か以上かということと、とられた方略について2×5の二元配置分散分析を行った。その結果、対処方略 ($F(4,567)=33.88$) とデートバイオレンス・ハラスメントの程度×対処方略の交互作用 ($F(4,567)=6.712$) がそれぞれ1%水準で有意となったが、バイオレンス・ハラスメントの程度の主効果 ($F(1,567)=1.436$) については、有意差はなかった。対処方略については、数値としては、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順で効果があり、多重比較の結果、抗議—逃走、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—静観、無視—静観、反抗—静観の間がそれぞれ5%水準で有意となった。交互作用は、反抗方略以外では、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が重いほどそれぞれの方略の効果が高い傾向を示しているのに対して、反抗方略では逆にデートバイオレンス・ハラスメントの程度が軽いほど方略の効果が高いということによって生じていた。各条件ごとの平均値を Table 8 に示した。

つきまといに対する対処方略とその効果

つきまといについて、その程度が平均以下か以上かということと、とられた方略について2×5の二元配置分散分析を行った。その結果、対処方略 ($F(4,438)=24.407$) が1%水準で有意となったが、バイオレンス・ハラスメントの程度 ($F(1,438)=0.324$) と程度×対処方略の交互作用 ($F(4,438)=0.581$) については、有意差はなかった。対処方略については、数値としては、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順で効果があり、多重比較の結果、抗議—無視、抗議—反抗、抗議—静観、逃走—反抗、逃走—静観、無視—反抗、無視—静観の間がそれぞれ5%水準で有意となった。各条件ごとの平均値を Table 8 に示した。

4. まとめと考察

本研究では、デートバイオレンス・ハラスメン

トにおける対処方略とその効果について検討した。今回の分析でわかったことをまとめると以下のようになる。

- 1) デートバイオレンス・ハラスメントへの対処方略としては、デートバイオレンス・ハラスメントの行為に関係なく、抗議が最もよくとられ、次いで、静観・無視がとられる。逃走・反抗はあまりとられない。
- 2) この方略選択については男女差はあまりない。
- 3) 実際に有効な方略はデートバイオレンス・ハラスメントの行為の種類に関係なく、抗議>逃走>無視>反抗>静観の順である。
- 4) 効果についても男女差はあまりない。
- 5) 静観・反抗は事態を悪化させる場合がある。
- 6) デートバイオレンス・ハラスメントの程度が軽い場合、対処方略として抗議・静観がとられることが多いが、程度が重くなると逃走・無視・反抗の方略がとられやすくなる。
- 7) しかしながら、その有効性に関しては3)と同様の順序であり、変わらない。
- 8) 身体的暴力、支配監視、言語的暴力、性的暴力については、デートバイオレンス・ハラスメントの程度が重くなると対処策の効果も少なくなる。

本研究は、一般の人々を対象にしてデートバイオレンス・ハラスメントへの対処方法について調査したものとしては、おそらく、本邦でははじめてのものであり、それなりの意義があると思われる。得られた結果の多くは直感的にも納得のいくものであるが、比較的重いデートバイオレンス・ハラスメントにおいて、対処方略の効果があまりないなど、今後、行政サービスのにも司法的な対策という観点でも考えていく必要がある問題点を浮き彫りにした結果であるともいえるであろう。デートバイオレンス・ハラスメントについてはその実態や全体像がまだまだ明らかになったとはいえないので、今後も引き続いた調査研究が必要であ

ろう。

文 献

- 越智啓太, 長沼里美, 甲斐恵利奈 (2014). 大学生に対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成 法政大学文学部紀要, 69, 63-74.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 長沼里美 (2015a). 女性蔑視的態度がデートハラスメントに及ぼす効果 法政大学文学部紀要, 70, 101-110.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2015b). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (1) — 被害に焦点を当て

た分析 — 法政大学文学部紀要, 71, 135-147.

越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2016). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (2) — 加害に焦点を当てた分析 — 法政大学文学部紀要, 72, 161-171.

注 釈

- 1) 本研究は, 科学研究費補助金 (基盤研究 C) の助成を受けて行われた。
- 2) 本研究の一部は第 56 回犯罪心理学会大会 (奈良県文化会館) において発表された。

Coping Behavior of Dating Violence and Harassment Victims
Development and Analysis of the Revised Version of
the Dating Violence/Harassment Scale (5)

Keita OCHI

Abstract

In this study, we examined what kind of coping strategy the victim takes against date violence and harassment and how it would be effective. As a result, it turned out that the verbal protest is the most effective, and the rebellion and observance are less effective. In addition, it is also shown that as the degree of dating violence and harassment becomes greater, more aggressive strategies come to be taken, and that the degree of dating violence and harassment becomes heavier, the effect of coping strategies decreases.

Keywords : dating violence, domestic violence, romantic relationship, coping, stalking